

# 簡単な帯考案

## 狛江の鈴木さん入賞

チャレンジ精神あふれる70歳以上の高齢者をたたえる「第9回ニューエルダーシチズン大賞」（読売新聞社主催）の受賞者が決まった。都内からは、病気をきっかけに着物の新しい着方を編み出し、事業展開にまでこぎ着けた鈴木富佐江さん（73）（狛江市）が選ばれた。



特許を取った帯を手にする鈴木さん（調布市の工房で）

「これまでやってきたことが認められた。周りの皆さんに感謝しています」。受賞の知らせに、控えめに

喜んだ。

8年前に発症した脳梗塞が大きな転機となった。後遺症で、右手が背中に回ら

なくなり、大好きな着物の帯を締められなくなった。呉服屋などに相談すると、帯を切つて前後に分ける「二部式」を勧められた。だが、着付けを教えてくれた祖母から、「職人さんが一生懸命作った大事な物」と言われた帯に、ハサミを入れることは出来なかった。

飲食店で、はし袋を帯に見立てて、背中に手を回さずに締める方法がないか研

究を重ねた。試行錯誤の末、折りたたんだ帯を縫い合わせ、結び目を作っておき、そこにもう一端をつなげて締める帯を考案した。

従来の帯の5分の1以下の時間で締めることができ、新聞で取り上げられると、問い合わせが殺到。2004年からは、作り方を教える教室も始めた。これまでの生徒は500人以上。卒業生に「のれん分け」し、宮城から沖繩までの13都府県で教室が開かれている。

開発した帯は、05年3月に特許を取得し、06年7月には、株式会社を設立、ライセンス販売も開始した。特許商品は現在、3件に増えた。

あつという間に過ぎたこの8年。「もし、病気にならなかつたら、全く違う人生だった」と振り返る。今でも再発の不安は付きまとうが、目標は着物文化のさらなる発展。「少しでも長く続けたい」と気持ちをお話している。